地域協働学校だより No.4

平成３０年８月２７日
新宿区立市谷小学校
地域協働学校運営協議会

「地域協働学校運営協議会」からのご報告です

オリンピック・パラリンピック関連行事として、７月１８日、車いすバスケットボールの選手でありパラアイスホッケーの選手としてピョンチャンパラリンピックにも出場された堀江航（ほりえわたる）さんにお越しいただき講演がありました。見学させていただきましたのでご紹介いたします。

車いすのアスリート　堀江航（ほりえわたる）さん

７月１８日、夏休み直前の猛暑の体育館に、車いすアスリートの堀江さんが来てくださいました。当日は生活用の幅の狭い車いすと、車輪がハの字型の競技用の車いすを持っていらっしゃいましたが、通常は義足で生活されているそうです。

サッカー少年だった子供時代

堀江さんは 1979 年東京生まれ。足の障がいは生まれつきのものではなく、子どものころはサッカーに夢中でした。小学校、中学校、高校、そして日本体育大学入学後もサッカー一筋でした。

事故で片足を失って

大学三年の時、オートバイの事故にあいました。骨折だけでなく血管を損傷してしまったため血液が流れなくなってしまい、生きるためには左足を膝下で切断せざるを得ませんでした。

それでもスポーツがしたい... 車いすバスケット

片足がなくてはもうサッカーはできない・・・それでもスポーツがしたい。「リアル」という車いすバスケットボールを扱った漫画を知っていた堀江さんは、退院するとすぐに車いすバスケットボールを始めました。そして 2 年後、もっと上手くなりたくて車いすバスケットボール先進国アメリカのイリノイ大学へ留学します。大学のチームに入るには大学生にならなければならないので、英語を勉強し、イリノイ大学大学院（体育学・教育学）へ入学しました。イリノイ大学の車いすバスケットボールチームが全米大学選手権で優勝したときは、日本人として初めてのメンバーとなり、大学院も見事卒業されました。

世界のプロの舞台で

堀江さんは次に、車いすバスケットボールのプロリーグがあるスペインへ行きました。スペイン一部リーグのミデバでプロ選手として活躍後、ドイツの強豪チーム、ランディルに移籍、チームは 2012 年にヨーロッパプロリーグチャンピオンになりました。

パラリンピック

アメリカ時代からバスケットだけでなく車いすソフトボールやマラソンなど様々なスポーツに挑戦していた堀江さんでしたが、2012 年に帰国後、冬の種目パラアイスホッケー（アイススレッジホッケー）に誘われました。2014 年のソチパラリンピックでは惜しくも最終予選で敗退し本選出場を逃しましたが、2018 年のピョンチャンパラリンピックでは本選出場を果たしました。

児童たちの車いすバスケットボール体験

★堀江さんは、まず競技用の車いすが普段の生活用のものとはいくつかの点で違うことを教えてくれました。①タイヤが斜めのハの字型なので回りやすい。②後ろに小さいタイヤがついていて、反り返るような姿勢でも転倒しない。③足や腰を止めるベルトがついていて体をしっかり固定できる。（生活用の車いすは出入りしや

すいよう幅は狭めで、後ろのタイヤがないため前方を持ち上げて多少の段差を上がれるようになっています。）
★車いすバスケットボールのルールが通常の競技と違う点は、⑴ダブルドリブルをしてもよい⑵トラベリングは３歩ではなく３こぎ。
堀江さんがくるくると回って見せたり、シュートをしたりの実演をしてくださったあと、次にいよいよ、各学年から一人の児童が体験させてもらいました。

背の高い大人用の競技用車いすを慣れない手つきで操作する児童も、すぐにコツをつかんでくるくると回る児童もいました。ボールを持つと、ボールを扱いながら車いすも操作するのは大変そうで、車輪の幅が広く座高も高いのでドリブルの感覚をつかむのが難しそうでした。一方見事にシュートを成功させる児童もいました。「感覚が難しい」「普段やらないことだから操作が難しい」「意外とやりやすかった」「ひざや足を使えないので、手だけでシュートするのが難しい」などの感想がありました。

児童からの質問コーナーより

Q. プレーは難しくないんですか

A. はじめは難しいけれど、練習して、勝ったりすると嬉しいしもっと練習しようと思う。上手くなるともっと楽しくなります。

Q. パラリンピックに出た時はどんな気持ちでしたか

A. 世界のトップアスリートが出場する中、日の丸を背負って出るのは誇らしい気持ちだったし、ピョンチャン（韓国）は近いので友人や家族も来てくれてうれしかったです。

Q. 外国に行くのは不安ではなかったですか

A. アメリカに行ったときは友達もいなくて言葉もわからなかったけれど、スポーツを通じて友達がすぐできたし、英語もスポーツを通じて学びました。

Q. 足がなくなってから選手になろうとしたきっかけは何ですか

A. スポーツが好きで、スポーツをしたかったので、続けられるものを始めました。

Q. いろいろ挑戦してきた中で、つらかった時に励まされた言葉や立ち直った方法などはありますか

A. 試合に負けたり、事故にあったり、生きているとつらいこと嫌なことはもちろんあるけれど、友人や家族が支えてくれました。何かを一生懸命やっていると回りも応援してくれるし、自分もそういう人を応援したいと思う。そうするとつらいこともエネルギーに代わるし、成長のチャンスにもなります。

Q. 障がい者スポーツをやって良かったこと楽しかったことは何ですか。

A. 障がいに関係なくどれも好きなスポーツに変わりありません。でも一方で足を失くしたからこそプロ選手になれたし、パラリンピックやこういった講演会にもつながりました。好きなスポーツを続けたことでいろいろな可能性が広がりました。みんなも好きなことを一生懸命頑張ってください。

子供たちに伝えたいこと

一番伝えたいのは、好きなことを一生懸命やってほしいということ。また、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックにも興味をもって、いろいろな形で参加して盛り上げて欲しいです。

堀江さんは、左足を失った時も、「それならパラリンピックに出よう」とすぐに気持ちを切り替えたそうです。逆境をチャンスに変えるポジティブ思考！多くのスポーツに挑戦されていますが、ブラジリアン柔術では健常者の中でのトーナメントで上位入賞を果たされたとか。競技も生き方も制限しない、選択肢は一つではない、そんなことを考えました。貴重な機会を有難うございました。